

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間がこの世に生きてゆくためには、いろいろなことをしなくてはならない。自分を取り巻く環境のなかで、うまく生きてゆくためには、環境について多くのことを知り、その仕組みを知らねばならない。このために、自然科学の知が大きい役割を果たす。自然科学の知を得るために、人間は自分を対象から切り離して、客体を観察し、そこに多くの知識を得た。太陽を観察して、それが灼熱ねつの球体であり、われわれの住んでいる地球は自転しつつ、その周りをまわっていることを知った。このような知識により、われわれは太陽の運行を説明できる。

このような自然科学の知は、「自分」を環境から切り離して得たものであるから、誰だれに対しても普遍的に通用する点で、大きい強みをもっている。自然科学の知はどこでも通用する。しかし、ここで一旦切り離した自分を、全体いったんのなかに入れ、自分という存在とのかかわりで考えてみるとどうなるか。なぜ、自分はこのような太陽の運行と関連する地球に住んでいるのか。自分は何のために生きているのか、などと考えはじめるとき、自然科学の知は役に立たない。それは、出発の最初から、自分を抜きにして得たものなのだから、当然のこ

とである。太陽の動きや、はたらきは、自分と無  
関係に説明できる。しかし、他ほかならぬ自分という  
存在と、太陽とは、どうかかわるか。

太陽と自分とのかかわりについて、確たる知を<sup>(A)</sup>  
持つて生きている人たちについて、ユングは彼の  
自伝のなかで述べている（『ユング自伝Ⅱ』）。  
ユングが旅をしてプエブロ・インディアンを訪ね  
て行ったときのことである。インディアンたちは、  
彼らの宗教的儀式や祈りによって、太陽が天空を  
運行するのを助けると言うのである。「われ  
われは世界の屋根に住んでいる人間なのだ。われ  
われは太陽の息子たち。そしてわれらの宗教によ  
って、われわれは毎日、われらの父が天空を横切  
る手伝いをしている。それはわれわれのためばか  
りでなく、全世界のためなんだ」とインディアン  
の一人は語った。彼らは全世界のため、太陽の息  
子としての勤めを果たしていると確信している。  
これに対して、ユングは次のように『自伝』のな  
かで述べている。

かわいはやお  
〔河合隼雄『イメージの心理学』による〕

問 傍線部④「確たる知を持って生きている」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 固有の信仰を守ることによって、宇宙における自己の役割を果たしているということ。
- ② 自然科学を無視して、自らを中心とする宇宙観でしか行動しないということ。
- ③ 自分と自分を取りまく宇宙との関係を科学的に説明するということ。
- ④ 自らがなによりもこの宇宙の中心であると信じて疑わない生き方をしているということ。
- ⑤ 自分という存在なしには宇宙はありえないと思いをこんで、自己を賛美するということ。